



大貫 隆 [著]

東京大学名誉教授
古代キリスト教思想史

福音書の隠れた難所

旅に難所はつきもの。
超えてこそ見える絶景！

9月1日刊行予定



四六判上製・416頁・定価 3,080 円
本体 2,800 円 + 税 ISBN978-4-911054-63-5 C0016

イエスはなぜ禿鷲と死体を語るのか。ナゾラ人とは何者か。自身を「食物」にせよとの人肉嗜食発言（ヨハネ福音書）はどう解すれば良いか……。福音書に立ちはだかる5つの「難所」を取り上げ、研究者生涯を傾注して取り組んできた成果が結晶！
付録 荒井献の学術研究 —— その功績と遺された課題

主な目次

第一章 人の子と禿鷲

—— マタイ福音書 24 章 28 節／ルカ福音書 17 章 37 節によせて

- I 禿鷲の言葉（マタイ 24／ルカ 17）—— 元来独立の格言
- II 「ブルタルコス／ルクレティウスの格言」と禿鷲の言葉
- III イエスの「神の国」のイメージ・ネットワークへ
- IV Q資料からマタイとルカ福音書へ

第二章 神の国はあなたがたの〈内面〉に

—— ルカ福音書 17 章 21 節の「エントス」ἐντός と禿鷲の言葉（ルカ 17.37）

- I 先行研究について
- II 本章の課題
- III ルカ福音書一七章 20—37 節における伝承と編集
- IV トマス福音書語録 3 と 113 への影響史

第三章 ふたたびマルコ福音書四章 12 節の「メーポテ」μήποτε について

—— 吉田忍氏へ 19 年後の応答

- I コイナー・ギリシア語における「メーポテ」μήποτε の事例
- II マルコ福音書四章 12 節の背後のアラム語（タルグム）伝承の問題

第四章 「ナゾラ人」の系譜

—— 史的イエス研究の忘れ物

- I はじめに
- II 「ナゾラ人」（Ναζωραῖος）の語源の問題
- III 「ナゾラ人」の起源と広が
- IV おわりに

第四章補論

マンダ教文書『ハラン・ガワイタ（内なるハラン）』
本文翻訳

- I ユダヤ教支配下の時代（§ 2—13）
- II パルティア王国とササン朝ペルシア支配下の時代（§ 14—21）
- III イスラム教支配下の時代（§ 22—24）
- IV ヒビル・ツィワの教え（25—34）

第五章 「人の子」の肉を食べ、その血を飲む —— ヨハネ福音書六章 51 b—58 節と聖餐式

はじめに

- I 創世記の原初史
- II ヨハネ福音書六章 51 b—58 節
- III 文化人類学の「贈与論」
- IV シモヌ・ヴェイユの聖餐論と「犠牲の思想」

付 録 荒井献の学術研究

—— その功績と遺された課題（追悼講演）



著者紹介 大貫 隆（おおぬき・たかし） 1945 年静岡県浜松市生まれ。1968 年一橋大学卒業、1972 年東京大学大学院人文科学研究科西洋古典学専攻修士課程修了、1979 年ミュンヘン大学神学部修了・神学博士、1980 年東京大学大学院博士課程（前記）単位取得退学、東京女子大学専任講師、1991 年東京大学教養学部助教授、2009 年同名誉教授、自由学園最学部長（—2014）。**主な著作**：『世の光イエス —— ヨハネ福音書のイエス・キリスト』（1984 年、改訂増補版、1996 年）、『福音書と伝記文学』（1996 年）、『ロゴスとソフィア —— ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』（2001）、『聖書の読み方』（2010）、『終末論の系譜 —— 初期ユダヤ教からグノーシスまで』（2019）、『イエスの「神の国」のイメージ —— ユダヤ主義キリスト教への影響史』（2021）、『ヨハネ福音書解釈の根本問題 —— プルトマン学派とガダマーを読む』（2022）、『グノーシス研究拾遺 —— ナグ・ハマディ文書からヨナスまで』（2023）『原始キリスト教会の「贖罪信仰」の起源と変容』（2023、2024²）著書多数。